



神谷小中学校 令和2・3年度 いの町教育委員会研究事業指定発表会 part 2

公開授業 第5・6学年 国語科「大造じいさんとがん」「ヒロシマのうた」

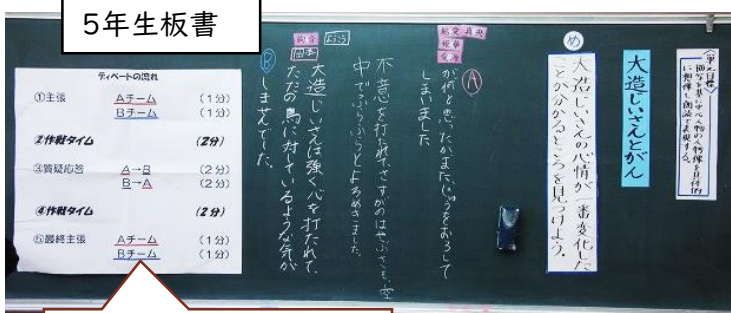
第5学年は「大造じいさんとがん」という物語文から、大造じいさんの心情が一番変化したと分かるところを見つけ、なぜそう読み取ったのかを児童同士で話し合う授業でした。まず、児童は本文から大造じいさんの心情が変化したと思う一文を抜き出しました。次に、同じ意見の児童でチームを作り、相手チームを納得させるようなディベート形式の話し合いをしました。5名の児童の意見が1人対4人に分かれてしまいましたが、どちらも自分の意見を主張したり、相手チームに質問したりしました。最後に児童は、相手チームの言いたいことは分かったか、どういうところが分かったか、という振り返りをしました。



第6学年は「ヒロシマのうた」という物語文について、物語の内容にぴったり合う新しい題を考える授業でした。まず、児童は「ヒロシマのうた」についてのウェビングマップを黒板に書きました。次にマップの中の言葉から、新しい題にふさわしい物を選び、理由と共にノートに書きました。二人の児童は、いくつか考えた題の中から、一つの題を選びました。最後に振り返りとして、題を決めた感想や、物語文への疑問等をノートに書きました。

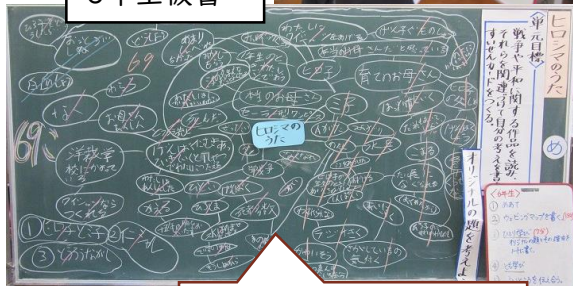


5年生板書



ディベートの流れを掲示

6年生板書

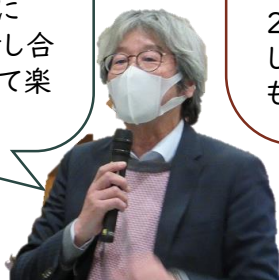


子どもが作る「白い黒板」

授業の講評

ディベート的話し合いの授業でしたが、子どものグループが1人対4人になりました。それでも、質問されたら答えていました。強い学び手はこうして育つんですね。講義説明型の授業ではなく、発問によって意見が分裂し、対話・話し合いをする授業は、子どもにとって楽しいのです。

菊池省三先生



子ども同士が支え合って学んでいました。ディベート的な話し合いの際「納得はしません」と言えていましたが「確かに…でも」「そうなんですけど…」と受容しつつも納得解を出そうとしていました。それが自由発言で出ていました。課題を設定するしたら、1対4で話し合うのではなく、2対3になるともっと盛り上がると思いました。自分の意見とは違う立場になっても話ができたらいいと思いました。

是永かな子先生

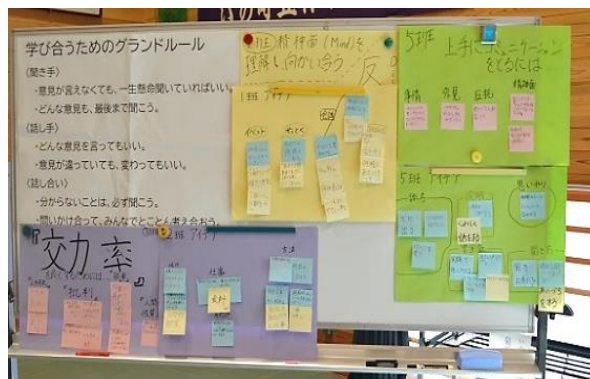
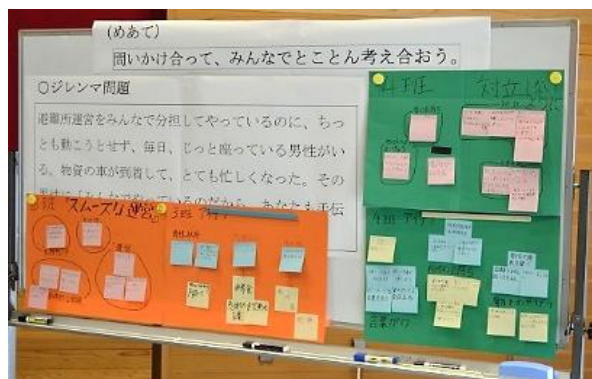


「ジレンマ問題」を解決しようという事で、「避難所運営をみんなで分担してやっているのに、ちっとも働こうとせず、毎日、じっと座っている男性がいる。物資の車が到着してとても忙しくなった。その男性に『みんなでやっているのだから、あなたも手伝ってください。』と言う？言わない？」というテーマで全4時間の内3時間目を体育館で行いました。

前時までに既に「精神面（Mind）を理解し、向かい合う」や「スムーズな運営を目指す」など各班の意見が出そろっており、その実現のための具体的な方法について、「各班で意見集約→全体発表→質疑応答」という流れで授業が進みました。



生徒の司会ですべてが進んでおり、先生方はサポートに徹して1時間の授業を構成していました。また、質問に対する応答もそれぞれの班で話し合ったり、他の班から「～すればよいと思います。」という意見が出たりする等温かい雰囲気でした。印象的だったのは、じっと座っている男性を非難するよりも、男性の心情を理解しようとしたり、男性が前向きになれるように「楽しく活動をしている姿を見せる」、「楽しいイベントなどをして男性が協力したくなる雰囲気をつくる。」等の意見が大勢を占めていたことでした。



授業の講評

正面から、あのようなテーマで行う授業はなかなかありません。たとえ上手いかわなくても、全教員で子どもと一緒に作ろうとしたことが、学校や子どもたちを飛躍的に伸ばしていくポイントではないかと思います。



菊池省三先生

子ども主体に授業を組んで、先生は完全にファシリテーターになっていました。子どもたちだけで動けるという、「支援のひき算」になっているのではないのでしょうか。高校になったらもっとこのような活動が求められますし、主体的で対話的な深い学びにどうやって自分たちで導いていくかが課題となってくると思います。そんな時、「発言」を支え合う姿が見られました。（「～さんと同じで」「～さんの発言を聞いて納得しました」）人の話を聞いているから、「その次に…」という発言で支え合っていたと思います。先生の役は「できるかな？」「理由は？」のように思考を深める質問をし、深い学びに導いていました。一つの班が3、4人だったので、みんなが自分事として考えていました。質問もすぐに出ていましたし、質問がない時もあえて質問するということもできていました。今後の課題を言うならば、即席ロールプレイをすることで、よりリアリティを持って考えることができると思います。



是永かな子先生